東奥日報社提供

東　奥　日　報
2022年（令和4年）10月19日（水曜日）（23）

人をつくる　地域と歩む
八戸工業大学半世紀
―上―

キャンパス今昔

学生支援　教員が親身に

八戸工業大学のキャンパス内にある木々が色づき始めた10月のある日。正午のチャイムが鳴ると、売店を併設した学生ホールがにぎわい始めた。テーブル席で昼食を取りながら談笑するグループ、ベンチで一人動画を見ながらくつろぐ学生。どこの大学でも見られる光景ではあるが、30代以上の大学OBや長く大学に勤める教職員たちは「昔に比べて女子が増え、学内の雰囲気が華やかになった」と口をそろえる。

同大には本年度、工学部工学科（1年生のみ）、工学部5学科（2年生以上）、感性デザイン学部感性デザイン学科に計約1100人が在籍している。このうち女子学生は全体の13・7％（約150人）を占める。一方で1992年度の学生数は現在の2・4倍となる2700人超。女子は約3％（約90人）と少数だった。坂本禎智学長は女子学生が増えた理由を「2005年の感性デザイン学部開設が大きい」と説明する。感性デザイン学部だけを見ると男女比率はほぼ半々だ。

現在、工学部工学科システム情報工学コースで教壇に立つ小玉成人教授（48）＝秋田県出身＝は92年度に同大工学部電気工学科に入学した。当時を「男子校みたいな雰囲気だった」と振り返り、「学内の廊下に人があふれ、学生用駐車場に車を止められず、昼時は食堂に入れないくらい混雑していた」と笑う。

小玉教授は同学部卒業後に同大大学院へ進み、博士後期課程を修了した01年に助手として着任。30年にわたり大学の歩みを見続けてきた。「昔も今も変わらないのは学内の自由な雰囲気と、学生と教員の距離が近いこと。担任教員が親身になって学生をサポートし、きめ細かい対応ができるのが本学の良さ」と語る。

地元六戸町で建築設計研究所を開業した1級建築士の豊川悠（はるか）さん（35）＝同大工学部建築工学科卒、同大大学院修士課程修了＝は「学生時代の先生や仲間と今もつながっており、大学の人脈が役立っている。仕事で大学卒業生の先輩や後輩に会うことも多く、地域に根差した大学だと実感する」と言う。

現在、同大非常勤講師も務める豊川さん。自身の経験を踏まえ、後輩たちへ「学生のうちに旅をしたり本やネットで情報を得たりして『外』も見て、地域の良さに気づいてもらいたい。そして将来、学んだことを地域に還元してほしい」とアドバイスする。

◇

1972年4月、八戸市に開学した八戸工業大学が今年、50周年を迎えた。北東北唯一の工学系大学の現在の姿に迫り、将来を展望する。

（千葉真由美）

※この連載は3回続きです。

昼休みを過ごす学生たちでにぎわう八戸工業大学2号館1階の学生ホール

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」